でリーダーとして活躍し、五四年には修道士となり、六二年にはキリスト教教育の主教に叙任された。総主教となった七一年当時、エジプト国内ではイスラーム復興やサーダート大統領のイスラーム主義寄りの政策によりコプトムスリム関係は危機に瀕していた。かかる社会・政治状況のなかでコプトの権利擁護のため積極的に政治に介入したシヌヌーダ三世はサーダートと鋭く対立し、最終的には八一年サーダートがシヌヌーダ三世を西方砂漠の修道院に幽閉させる事態にまで発展した。他方、ムバラク政権下では、コプト共同体の置かれた立場に対する積極的改善はなかったものの、政権がイスラーム主義勢力とは距離を置き、急進派の弾圧に力を入れたため、結果的に教会―政権関係は改善された。これにともない、シヌヌーダ三世の姿勢もそれまでの闘争的なものではなく、より融和的なものとなった。

つぎにシヌヌーダ三世が民衆によってどのようなイメージを持たれていたのか見てみよう。考察の対象とするのは、筆者が二〇一二年七月に首都カイロと南部ミニヤ県の農村で三三名に対して行なったシヌヌーダ三世の業績等に関するインタビュー調査の結果である。

シヌヌーダ三世のイメージとしてまず挙げたのが「賢者」という回答だった。これは、政権との対立、急進的イスラーム主義勢力によるコプト教会への襲撃、海外移住者の増加など、新たな問題が顕在化した困難な時代にコプト共同体の代表として活動した彼の姿勢を肯定し、評価していることを表している。「教育者」というイメージは毎週水曜日にカイロの聖マル

コ大聖堂で行なっていた一般信徒に対する教育的レクチャーによるところが大きい。霊的な事柄だけでなく、日常的、個人的なことなど多岐にわたる質問に対応するシヌヌーダ三世の姿は一般信徒に親しみやすさを与えた。また彼は「ディアスポラのための活動」を積極的に行なった総主教としても評価が高い。政治・経済・宗教的理由から永続的に欧米諸国へ移住したコプトは、現在では二〇〇万人以上いるといわれる。シヌヌーダ三世は、自身の定期的な訪問だけでなく、主教、司祭、修道士の派遣、現地での教会・修道院建設にまで活動の幅を広げた。

このように民衆のシヌヌーダ三世の評価は肯定的なものばかりだったが、この背景はコプト正教会のある種の権威主義的体質が考えられる。コプト正教徒にとっては、総主教をはじめとした高位聖職者は神と一般信徒を媒介する聖なる存在であるため、一般信徒が彼らの言動に対する疑問や批判は原則的には不可能である。しかし、実際には内部批判があったこともまた事実である。今後はその点についての検討もおこなっていきたい。

中世ユダヤ教の聖書解釈における基準の問題

志田 雅宏

中世のユダヤ教聖書解釈は、従来のラビたちの聖書釈義(「デラシュ」)から、聖書テキストの字義的解釈(「プシヤト」)への転回として描かれる。方法的に言えば、「デラシュ」とは聖書から法規や教訓、説話を導き出す解釈をさすのに対し、「プシヤト」とは「テキストが意味すること」の理解を目的とする解

積である。十世紀のバビロニアのラビ・サアディア・ガオンは、聖書テキストは字義的に理解されなければならないとする「プシャト」主義を提唱し、聖書のアラビア語訳と註解を著した。その後、イスラーム・スペインではアラビア語圏における言語学の発展を受け、聖書テキストの文法的説明を主眼とする方法が確立された。そして、十一・十二世紀に入ると、キリスト教圏のフランス北部に学派をひらいたラシと、イスラーム・スペインの聖書解釈の頂点に位置するアブラハム・イブン・エズラがそれぞれ聖書註解を著した。この二つの註解はその後のユダヤ教における聖書学習のテキストとして位置づけられ、きわめて大きな影響力を持ったが、その学習をもっとも体系的かつ詳細におこなったのが、十三世紀のラビ・ナフマニデスであった。

こうした聖書解釈の営みを解釈史として記述しようとするとき、そこには大きく分けて二つの立場が存在する。ひとつは注釈家を取り巻く文化的・社会的状況に着目し、彼らが遭遇した出来事や体験と彼らの解釈テキストの関連性をみるというものである。たとえばそれは、ラビたちの口伝律法を否定するユダヤ教異端派との戦いが、サアディアの聖書解釈の方針に決定的な影響を及ぼしたという説明や、ラシの聖書註解には当時の十字軍による迫害の悲劇が反映されているといった説明である。しかし、その一方で、「プシャト」主義が「聖書テキストそのものの意味」を探求する普遍的な志向性を持っているとするならば、それが体現された彼らの解釈テキストを個々の歴史的文脈にすべて還元するべきではないという立場もある。たとえ

ば、ナフマニデスは『トラーラー註解』執筆時にキリスト教徒との宗教論争や故郷からの追放、パレスチナへの渡航といった苛烈な体験をしているが、彼の註解ではそれらの要素よりも、ラシとイブン・エズラの註解に対する学習が大半をしめている。そして、その解釈者の関心が同時代的な事柄にとどまらないとすれば、第一の立場を排他的に取るについては慎重であるべきだと考えられる。

中世の注釈家は共同体を指導する教師であり、教典を学ぶ者でもあった。そして、この役割は、教典を読む営みの同時代性と普遍性を彼らに意識させたのではないか。だとすれば、彼ら自身がすでに「解釈史」を意識していた可能性が浮かび上がる。なぜなら、彼らはそれぞれの方法で「正しい」解釈の基準を作り出す中で、革新的な「プシャト」と伝統的な「デラシユ」の関係性の構築に取り組んだからである。さらに、そこには教典と読者の関係における視点の移行も確認される。最初の「プシャト」主義の提唱者であるサアディアは読者に視点を置いた基準の構築に努めた。それに対し、ラシやイブン・エズラは解釈内容や解釈方法に視点を定め、ナフマニデスは聖書テキストの定義にその視点を置いた。こうした基準の構築に関する彼らの主張に対して、個々の時代における学問的な発展や思想的な背景が影響を及ぼしていることは間違いない。しかしそれと同時に、彼らはそうした時代や地域を超えたところに、聖書テキストの「正しい」意味をめぐる議論の場を想定しているともいえる。注釈家たちはしばしば現実における出来事を聖書に書かれた事柄の成就として認識する一方で、テキストの意味を

めぐる議論の蓄積に自らを位置づけた。ひるがえせばそれは、
 教典を学ぶ営みが持つ意義をとらえるためには、同時代性と普
 遍性の双方に目を向ける複眼的な視点が必要とされるというこ
 とであろう。

第四部会

『金剛般若経』における即非の論理と「如」の思想

末村 正代

即非の論理とは、「金剛経の禪」（『鈴木大拙全集』第五巻、
 以下〔巻数／頁数〕と略記）において鈴木大拙によって提唱さ
 れた矛盾的論理である。他方「如」の思想とは、彼がその仏教
 論で再三言及する超論理的ともいえる思想である。本稿では大
 拙の思想に通底する何らかの構造を読み解く手がかりとして、
 この一見相矛盾する両者の共通項を考察したい。

初めに、大拙が即非の論理を見出した『金剛般若経』と、即
 非の論理について略説したい。『金剛般若経』は般若経典群の
 ひとつで、無著・世親・智顛・吉蔵による註釈が遺されている
 ことからわかるように、各地で非常に重視された経典であつ
 た。特に中国仏教、とりわけ禪宗はこれを重んじていることであ
 り、その即非の論理とは、この『金剛般若経』第十三
 節に基づいて以下のように公式化されたものである。「AはA
 だと云ふのは、AはAでない、故に、AはAである。これは肯
 定が否定で、否定が肯定だと云ふことである。」〔五／三八〇―
 三八一〕次いで漢訳語としての「如」に関してその変遷に触
 れておきたい。「如」とは元来サンスクリット語 *tathā* 及び
tathata という指示語の漢訳であり、当初は本無と意識されて
 いた。そして本無に代わって本格的に真如を採用した釈道安に
 至るまで、本無・如・如如などが乱用される時代が続いたよう